

On the Dialectal Distribution of the Basis of the Sho River in Toyama Prefecture

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Kawamoto, Eiichiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00005239

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



富山県庄川流域の方言分布*

川 本 栄 一 郎

はじめに

富山県庄川流域には、ズーズー弁をはじめ、「ワ」と「バ」の混同・語中尾のガ行子音が〔g〕となる現象・特異な俚語など、種々の変わった方言現象が数多く分布している。

これらの現象については、すでにいくつかの研究報告があるが⁽¹⁾、しかし、その実態はまだ十分明らかにされていない。標準語化が急速に進みつつある現在、その実態を早く把握しておかないと、そういう特異な現象もやがて失なわれてしまうことになるかもしれないと考え、

(1) 庄川流域の方言分布にはどんな地域差が見られるか。

(2) 地域差があるとすれば、それはどんな歴史を反映していると考えられるか。

の2点を課題に、昭和45年9月から昭和46年3月にかけて、庄川流域とその周辺地域で言語地理学的調査を行なった。

以下、調査の結果を報告し、あわせて解釈の可能性についても考えてみることにしたい。

1 調査方法

調査地点は全部で70地点。内訳は、富山県が60地点、石川県が6地点、岐阜県が3地点、新潟県が1地点となっている。庄川流域以外の地域も調査したのは、分布のひろがりやどの程度になっているかを見ようとしたためである。調査地点の位置は地点番号を用いて図3に示してある。

調査項目は全部で134項目。うち、語彙に関する項目は59、文法に関する項目は2、音韻に

関する項目は73である。語彙に関する項目は、おもに、国立国語研究所編『日本言語地図』（第1集～第4集）から選んだ。その多くは、庄川流域で複雑な分布を示す語である。次に、調査項目として選んだ語例を掲げる。

蛙・ひきがえる・おたまじゃくし・めだか
 ・かまきり・かたつむり・なめくじ・蟻地獄・じゃがいも・さといも・とうもろこし
 ・かぼちゃ・桑の実・げんのしょうこ・がんもどき・炊く・煮る・塩味がうすい・しおからい・匂いを嗅ぐ・いろり・上座・下座・右の座・左の座・あぐらをかき・坐る
 ・ネマルの意味・コワイの意味・恐しい・黄色い・捨てる・投げる・おんぶする・背負う・かつぐ（材木を）・かつぐ（天秤棒を）・かつぐ（二人で）・数える・糠・膝
 ・かかし・曾孫・玄孫・分家・親類・旋毛・眉・ものもらい・まぶしい・中指・薬指
 ・しもやけ・つらら・凍る・凧・お手玉・片足跳び・肩車（以上、語彙に関するもの）
 ・買った・借りた・書いている・読んでいる（以上、文法に関するもの）
 ・獅子・蜆貝・沈む・寿司・涼しい・筋・知事・つつじ・地図・口・かなづち・土・煤・鈴・雀
 ・さかずき・靴（以上、「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」に関するもの）
 ・わかめ・綿・毘・藁・わらじ・わらび・割箸・笑う
 ・悪い・泡・皺・電話・バナナ・ばら・おおばこ・鞆・鯖・柴・蕎麦・そろばん・たばこ・なんばん（とうがらし）
 ・看板・産婆（以上、「ワ」と「バ」に関するもの）
 ・いが・鏡・鍵・麦・脱ぐ・ふぐ・影・は

* 昭和47年9月16日受理

げ・ひげ・苳（以上、語中尾のガ行音に関するもの）・いか・柿・菊・六・酒・刷毛・婿（以上、カ行音の有声化に関するもの）・背中・汗・銭・風（以上、「セ」・「ゼ」に関するもの）・胃・板・糸・井戸・犬・柄・枝・江戸（以上、「イ」と「エ」に関するもの）

調査のしかたは、すべて、話者に絵を見せたり身振りをまじえたりしながら質問し答えてもらう、いわゆる「なぞなぞ式」による。語彙に関する項目は、たいてい、『日本語地図』に示してある質問のしかたならびに絵を用いて調査した。

話者は、各地点1名を原則とし、その土地で生まれ育った老人だけを対象とした。年齢は70歳を基準とし、女性だけを調べた。ただし、適当な話者の見つからない地点では、男性も調べた。話者の性別と生まれ年は、後で掲げる「語彙の地点別一覧」の中に示してある。性別の次の数字は、すべて、明治何年生まれかを表わしている。

2 地理的分布

地理的分布については次の順序で述べていく。はじめに、地域差のあまり著しくない文法とアクセントをとりあげて分布の概略を説明し、次に、地域差の著しい音韻と語彙をとりあげ、具体的な事例を示しながら分布の状態をくわしく見ていくことにする。

2・1 文法の分布

概して言えば、文法の分布にはあまり大きな地域差が見られず、庄川流域も含めて富山県以西は、だいたい西部方言的である。たとえば、指定の「だ」は「ジャ」または「ヤ」、打消の「ない」は「ン」、打消完了の「～なかった」は「～ナンド」、打消連用の「～ないで」は「～イデ」、一段動詞の命令形「起きろ・見ろ」は「起キイ・見イ」、形容詞連用形の「赤くなる」は「アコーナル」、ハ行四段動詞連用形の「買った」は「コータ」、「借りる」の連用形「借りた」は「カッタ」となるなど。

文法現象についてもくわしく調べていけば、いろいろと地域差の出ることが予想されるが、今回の調査ではそこまで手がまわらず、わずかに、五箇山の西赤尾（地点番号5。以下、地点番号は（ ）で括って示す。）で、西部方言的な言い方と東部方言的な言い方が混交している「買った/借りた」と、五箇山の平村・利賀村・上平村の細島(7)に行なわれている「カイチョル」（書いている）・「ヨンジョル」（読んでいる）などの「～チョル」・「～ジョル」⁽²⁾しか調べることができなかった。ここでは、「～チョル」・「～ジョル」について述べることは省略し、「買った/借りた」についてだけ述べる。次に掲げる表は、西赤尾と西赤尾に隣接する菅沼(6)・小白川(3)における「買った/借りた」の状態を示したものである。

項目 \ 地点	菅 沼	西 赤 尾	小 白 川
買った	コータ	コータ	カッタ
借りた	カッタ	カリタ	カリタ

菅沼の西部方言的な「コータ/カッタ」（/の前にある語形は「買った」、後にある語形は「借りた」である。以下同じ。）と小白川の東部方言的な「カッタ/カリタ」が、両者の中間地帯にある西赤尾で混交し、「コータ/カリタ」となっている点が注目される。

なお、楮(4)は、西赤尾の南にあるにもかかわらず菅沼と同じ「コータ/カッタ」であるが、これは、次のような事情によるものであろう。

すなわち、西赤尾と小白川は、境川にかかっている橋を渡って直接交流できるのに対し、楮と小白川は、庄川を間にはさんで互いに向かい合っているにもかかわらず、両者を直接結びつける橋がなく、小白川から楮へ行くには、西赤尾を経由するかさもなければ上流の成出ダム付近にある吊橋を渡って行くかしなければならず、ために、小白川の影響が楮には及びにくく、それで菅沼と同じ「コータ/カッタ」がそのまま楮にも残ったものと解される。

庄川流域からは少しはずれるが、福井県大野

郡和泉村にも庄川流域と同様の現象が見られる⁽³⁾。

項目	地点	大野郡 和泉村	
	大野市 勝山市	朝日・後野 朝日前坂	下半原・下 在所・三面
買った	コータ	コータ	カッタ
借りた	カッタ	カリタ	カリタ

大野市・勝山市の西部方言的な「コータ/カッタ」と岐阜県に隣接する下半原・下在所・三面の東部方言的な「カッタ/カリタ」とが、両者の中間地帯、朝日・後野・朝日前坂のあたりで混交し、「コータ/カリタ」になっている点が注目される。

西赤尾や朝日・後野・朝日前坂などの集落が、東部方言の「カッタ」(買った)よりも「カリタ」(借りた)のほうを先に受け入れたのは、同音衝突を避けようとしたためではないかと思われる⁽⁴⁾。

というのは、もし、「カッタ」(買った)を先に受け入れると、「カッタ」(借りた)と同音衝突を起こし、コミュニケーションに支障を来すことになるので、「コータ」(買った)はもとのままに据置き、「カリタ」(借りた)だけを先に受け入れたという事情が考えられるからである。

「カリタ」(借りた)を受け入れてしまえば、後で「カッタ」(買った)を受け入れても、同音衝突を起こす心配はないから、次には、「カッタ」(買った)を受け入れ、下半原・下在所・三面のように「カッタ/カリタ」となることが予測される。

岐阜県と境を接する五箇山や福井県大野郡以外の西部方言地域では、標準語化に伴ってはいり込んでくる東部方言の「カッタ/カリタ」を、どういう形で受け入れているのであろうか。はなはだ興味の持たれる問題である。

なお、調べた限りでは、富山・新潟両県の県境付近には「コータ/カリタ」のような混交は見られず、境(63)・泊(62)はともに「コータ/

カッタ」, 市振(64)は「カッタ/カリタ」であった。

このたびの調査では、「買った/借りた」しか調べることができなかったが、東西両方言の接触地帯である富山県や新潟県には、このほかにも文法現象の混交が種々見られる。筆者が、昭和43年2月に富山市で聞いた「サカライニ」(から)や翌年4月に糸魚川市で聞いた「ヨマンダロー」(読まないだろう)という言い方も、その例の一つと言える。「サカライニ」は西部方言的な「サカイニ」と東部方言的な「カラ」とが混交したものであり、「ヨマンダロー」は西部方言的な「ヨマン」に東部方言的な「ダロー」が接続したものである。

富山県の文法現象については、内部における地域差をくわしく調べるとともに、東西両方言の接触によって生じた混交を探っていくことも、必要かつ興味ある問題だと思う。

2・2 アクセントの分布

アクセントも文法と同じように内部の地域差はあまりなく、東京式アクセントの分布する岐阜県側の集落と新潟県側の集落を除けば、あとはみな京阪式アクセントである。

巨視的に見れば、このように、あまり目立った地域差が認められないのであるが、しかし、微視的に見ると、アクセントの場合にもいろいろと細かな内部の差が目につく。特にその傾向の著しいのは五箇山である。真田信治氏の「富山県利賀谷におけるアクセントの動態——2拍名詞第2・3類を主として——」には、五箇山内部におけるアクセントの地域差がくわしく報告されている。

筆者は、「菊」と「靴」のアクセントしか調べなかったが、それでも、五箇山と他の地域との間には、次のようなアクセントの相違が見られた。●は高い音節、○は低い音節を表わす。

項目	地域	五箇山	五箇山以外の地域
菊		●○	○●, ○○
靴		●○	○●, ○○

「菊」と「靴」は京都アクセントでは●○、東京アクセントでは○●である。京都アクセントの●○が、五箇山にもそのまま残っているのではないかと思う。

真田信治氏が前掲の論文で述べているところによると、五箇山の利賀村では、「岩・北・人・家・裏・倉・塩」を除く2拍名詞第2・3類に属するほとんどの語が●○であり、しかも、これは、平村や上平村の○●よりも古いと考えられるということであるから、その可能性は十分ある。

因みに、「靴」は、2拍名詞第3類に属する語である。なお、「靴」は、堂(61)・滑川(60)・泊(62)でも●○であった。石川県では、小松市以南の地域に行くと「靴」はたいてい●○になる。

富山県のアクセントについては、文法の場合と同様、内部における地域差だけでなく、京阪式アクセントと東京式アクセントの接触地帯における現状と動向ということも、大きな問題となろう。

2・3 音韻の分布

富川県庄川流域には、標準語には見られないさまざまな特異な音韻が分布している。たとえば、

(1) 「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」を混同するズーズー弁的音韻

(2) 「ワ」と「バ」の混同

(3) 語中尾に現われるカ行音の有声化

(4) 語中尾に現われるガ行音の子音〔g〕

(5) 「セ」・「ゼ」が〔fe〕〔dʒe〕となる現象

(6) 「イ」と「エ」の混同

など。

このうち、「イ」と「エ」の混同は、ほとんど地域差を示さず、どこでもたいてい両者を仲間音の〔e〕で発音するが、あとの現象には地域差が著しい。その中でも、特に注目されるのは、五箇山と下流の平野部・海岸部との間に見られる次のような対立である。○は「ある」、

×は「ない」を示す。

音 韻	地 域	
	五箇山	下流の地 域
ズーズー弁	×	○
「ワ」と「バ」の混同	×	○
語中尾にくるカ行音の有声化	×	○
語中尾にくるガ行音の子音〔g〕	○	×
〔fe〕〔dʒe〕	○	×

このうち、ズーズー弁・「ワ」と「バ」の混同・カ行音の有声化は、いずれも新しく生じた訛りの現象、〔fe〕〔dʒe〕は古音の残存と考えられる。語中尾にくるガ行音の子音〔g〕については、にわかに新古は決めがたい。

いずれにしても、こうしてみると、五箇山には、新しく生じたと思われる訛りの現象は少なく、〔fe〕〔dʒe〕などの古音の残存が目立つ。

これに対して、下流の平野部・海岸部には、ズーズー弁・「ワ」と「バ」の混同・カ行音の有声化など、新しく生じたと思われる訛りの現象が著しく、古音の残存と思われるものはあまり見当たらない。氷見地方に四つがなを区別するところがあるということを知ったこともあるが、調べた限りでは、それらしきものは見出せなかった。あるいは、筆者が調査しなかったどこかの地点にあるのかもしれないが、今のところ、まったく見当がつかない。

一般に、訛りの現象は辺境に起こり易いと言われるが、庄川流域の場合は、それとはちょうど逆になっていて、秘境五箇山には訛りの現象が少なく、かえって、下流の開けた地域に訛りの現象が見られる点が注目される。

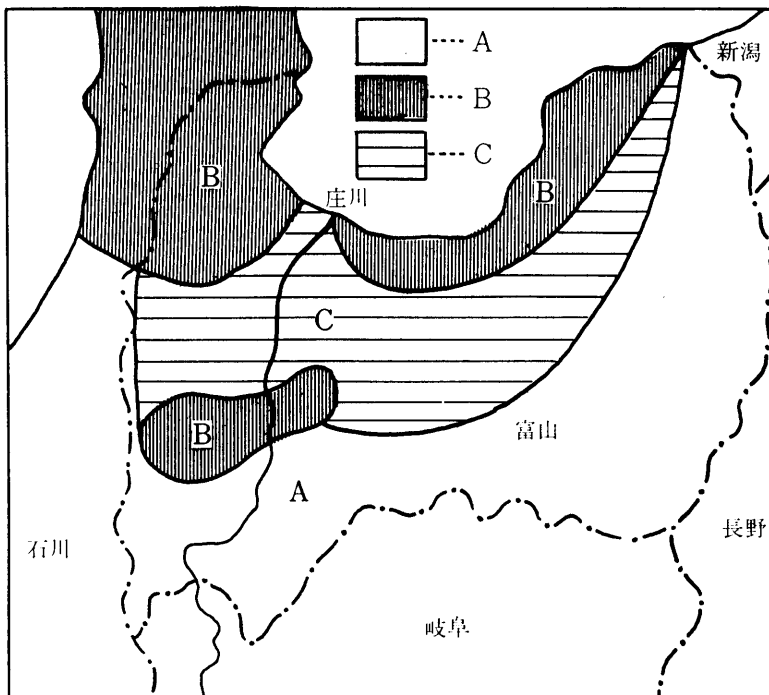
以下、それぞれの音韻現象について分布の概略を説明する。

2・3・1 ズーズー弁

この問題については、すでに、拙稿「富山県庄川流域におけるズーズー弁の分布とその解釈」⁽⁵⁾で述べてあるので、くわしいことは省略し、分布のあらましを述べるにとどめる。

図1は、庄川流域における「シ・ジ・チ」と

図1 「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」の分布



「ス・ズ・ツ」の分布を示したものであるが、この分布図に出てくるA・B・Cのうち、「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」を完全に混同するのはBである。Bの分布地域では、「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」の区別がなく、青森県・秋田県などの北奥系ズーズー弁と同じように、「シ・ジ・チ」も「ス・ズ・ツ」も〔si〕〔dzi〕〔tsi〕と発音する。たとえば、〔sisi〕（獅子・煤・寿司）・〔sidzi〕（筋・鈴）・〔kɯtsi〕（口・靴）・〔tsidzi〕（知事・地図）など。庄川流域におけるズーズー弁とは、このBのことである。

BとAの中間地帯にはCが分布しているが、Cの分布地域では、「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」を区別したりしなかったりするので、仮に、Cを準ズーズー弁と呼ぶことにする。Cの地域では、音声そのものもきわめて複雑で、〔fi〕〔dzi〕〔tʃi〕・〔ʃi〕〔dʒi〕〔tʃi〕・〔si〕〔dzi〕〔tsi〕・〔si̯〕〔dzi̯〕〔tsi̯〕・

〔sũ〕〔dziũ〕〔tsũ〕など、さまざまな音が用いられている⁽⁶⁾。

庄川上流の五箇山・白川や石川県の加賀地方・新潟県の市振などにはAが分布しているが、Aの分布地域では、標準語と同じように、「シ・ジ・チ」は〔ʃi〕〔dʒi〕〔tʃi〕、「ス・ズ・ツ」は〔sũ〕〔dziũ〕〔tsũ〕と発音し、両者を混同することがない。そこで、これは非ズーズー弁と呼ぶ。

以上のことを表にまとめて示せば次のようになる。

	A	B	C
シ	si	si	si }
ス	su		su
ジ	zi	zi	zi }
ズ	zu		zu
チ	ci	ci	ci }
ツ	cu		cu

A・B・C三者の関係については、

A→B→C

という変化が考えられる。その変遷の過程は、要約すれば次のようになる。

すなわち、かつて、この地方一帯にAが分布していたのが、B・C両地域で訛ってズーズー弁となり、さらにC地域では、明治以降の標準語化によって、「シ・ジ・チ」と「ス・ズ・ツ」を区別しようとする動きが活発となり、準ズーズー弁になったのであると。

おそらく、標準語化は、C地域に含まれる富山(58)・高岡(38)の両都市でまず行なわれ、砺波平野の散村地帯へ急激にひろまっていったも

のと考えられる。C地域における音声の混乱は、このような事情によって生じたものと思われる。

なお、論証の過程は、前掲の拙稿でくわしく述べてあるので、ここでは省略し、解釈の結果だけを示すにとどめる。

2・3・2 「ワ」と「バ」の混同

この問題についても、すでに、拙稿「富山県庄川流域における「ワ」と「バ」の分布とその解釈」⁷⁾で述べてあるので、本稿では、ズーズー弁の場合と同様、くわしいことは省略し、分布のあらましかだけ述べる。

図2 「ワ」と「バ」の分布

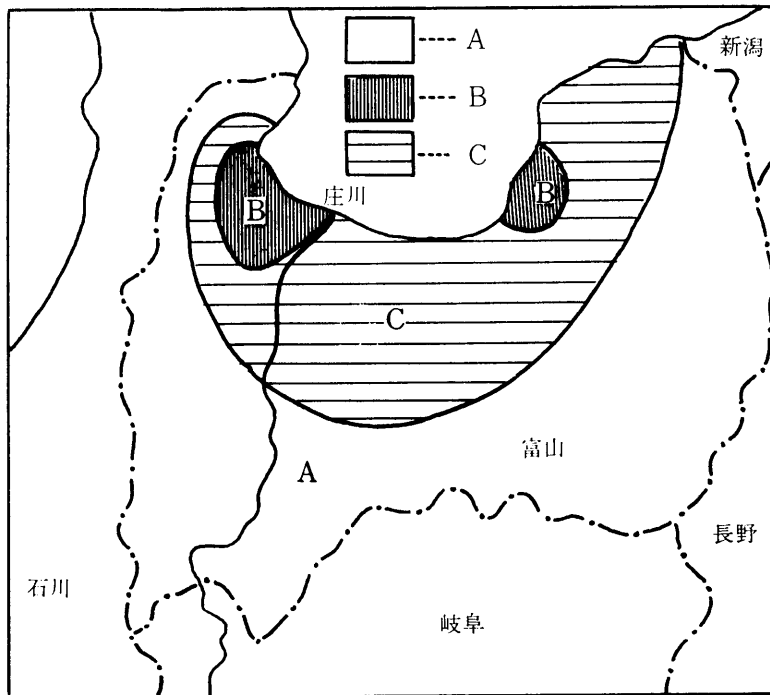


図2に出てくるA・B・Cのうち、「ワ」と「バ」の混同が最も著しいのはBである。Bの分布地域では、母音が前でない場合の「ワ」と「バ」はb-になり、母音が前になる場合の「ワ」と「バ」は-w-になる。たとえば、[bakame] (馬鹿め・わかめ)・[bata] (バター・わた)・[bafa] (ばら・藁)・[bana(na)]

(バナナ・藁)・[samba] (産婆)・[namba] (とうがらし)・[kawa] (川・河馬)・[siwa] (鋳・柴)・[sawa] (鯖)・[sowa] (蕎麦)・[tawako] (たばこ)など。

Cの分布地域でも「ワ」と「バ」を混同するが、Bの分布地域ほど著しくはなく、母音が前になる「バ」が-w-になるだけで、あとはみ

な標準語と同じに発音される。たとえば、母音が前にない「バ」はb-, 「ワ」は母音が前にあるなしに関係なくすべてw-, -w-になるなど。

Aの分布地域には、「ワ」と「バ」の混同はまったく見られず、「ワ」も「バ」も標準語と同じに発音される。

以上の状態を表にまとめて示せば次のようになる。

	A	B	C
ワ	w- -w-	b- -w-	w- -w-
バ	b- -b-	b- -w-	b- -w-

地域差は、母音が前にない場合の「ワ」と母音が前にある場合の「バ」だけに認められる。そこで、この点に留意し、上の表をさらに整理して示せば次のようになる。

	A	B	C
ワ	w- -w-	b- -w-	w- -w-
バ	-b-	-w-	-w-

A・B・C三者の関係については、
A→B→C

という変遷が考えられる。ただし、この変遷は、B・Cの分布地域にだけ該当し、Aの分布地域には該当しない。Aの分布地域には、もともとAが分布していたと考えられるからである。

おそらく、かつてこの地方一帯にAが分布していたのが、B・Cの分布地域でまずBの状態に訛り、次に明治以降の標準語化によって、「ワ」のb-がCの分布地域でw-に改まり、現在見られるような分布を示すことになったと解される。

Cの分布地域に、県都富山(58)が含まれている点から言って、標準語化はまずここで行なわれ、漸次周辺の町村に波及していったものと考

えられる。

なお、論証の過程については、前掲の拙稿でくわしく述べてあるので、ここでは省略する。

ところで、図2を先に掲げた図1と比べてみるに、両者は、分布の様相を若干異にしてはいるが、大勢においては、ほぼ似たような分布を示していることに気づく。図2の場合も図1の場合も、最も古いと思われるAが五箇山に分布し、それから生じた訛りと思われるBが海岸部に分布し、両者の中間には、標準語化によって生じたと思われるCが分布しているからである。

図2と図1の間に見られるこのような似通いは、単なる偶然の一致によるものではなく、それぞれの地域における文化的特性の反映によるものであると考えられる。

2・3・3 力行音の有声化

語中尾に現われる力行音の有声化は、五箇山と二俣(66)・田島(67)には見られず、それ以外の地域にだけ見られる。

たとえば、小杉(43)の[ɛ̄k̄a] (いか)・[ɛ̄k̄e] (池)・[sāk̄e] (酒)・[hāk̄e] (刷毛)・[tāk̄o] (蛸)・[mōk̄o] (婿)、重安(19)の[ɛ̄ga] (いか)・[sagādziki] (さかずき)・[ʃenaga] (背中)・[ɛ̄ge] (池)・[sāge] (酒)・[tāk̄o] (蛸)・[mūgo] (婿)、筏(25)の[sakādziki] (さかずき)・[senaka] (背中)・[sāge] (酒)・[dāgo] (大根)、堂(69)の[ʃenaga] (背中)・[ɛ̄ge] (池)・[tāk̄o] (蛸)、伏木(39)の[senaka] (背中)・[sāk̄e] (酒)、氷見(48)の[mōk̄o] (婿)、井栗谷(27)の[ɛ̄k̄e] (池)、鳩ヶ谷(1)の[dāgon] (大根)など。

これらの例を見て気づくことは、有声化を起こしているのは、母音がa, e, oの音節つまり「カ・ケ・コ」だけであって、母音がi, uの音節つまり「キ・ク」には見られないということである。それにいま一つつけ加えておかなければならないのは、有声化を起こしている地点の話者には男性が多いということである。

カ行音の有声化は、五箇山と二俣・田島には見られず、それ以外の地域にだけ見られるという事実からもうかがわれるように、次にとりあげるガ行子音の問題とも密接に関連する問題であるので、以上述べたようなことが、はたしてこの地方におけるカ行音の有声化の一般的な傾向を示すものなのか、それともある特定の話者に限って見られる特殊な現象にすぎないものなのか、今後もくわしく調べていかなければならない問題であると考えている。

2・3・4 ガ行子音

語中尾に現われるガ行音の子音が、破裂音の〔g〕になっているのは、調べた限りでは、五箇山全域と金沢市二俣(66)・同じく田島(67)の二地域だけである⁽⁸⁾。五箇山の下梨(10)を例にとって、音声の実態を示せば次のようになる。

〔ega〕(いが)・〔kagafi〕(かかし)・
〔kagami〕(鏡)・〔fidzimidgaɛ〕(蜷貝)
〔kagi〕(鍵)・〔muɟi〕(麦)・〔kagu〕
(嗅ぐ)・〔nuɟu〕(脱ぐ)・〔kage〕(影)
・〔hage〕(はげ)・〔ɕige〕(ひげ)・
〔itfigo〕(苺)・〔mago〕(孫)

五箇山と二俣・田島以外の地点では、語中尾のガ行子音は〔g〕ではなくて鼻音の〔ŋ〕である。

五箇山と二俣・田島で語中尾のガ行子音が〔g〕になるということは、これまでまったく報告されていない。明治38年刊行の国語調査委員会編『音韻分布図』(「第25図 ガ行鼻音NG分布図」)にも、昭和42年刊行の国立国語研究所編『日本言語地図』(第1集所収の「第1図 カガミ(鏡)の-G-の音」と「第2図 カゲ(蔭)の-G-の音」)にも出ていない。

なお、明治38年刊行の『音韻分布図』では、鳩ヶ谷(1)・椿原(2)・小白川(3)も含めて岐阜県大野郡一帯にガ行鼻音のNGがないということになっているが、筆者が実際に調べたところによると、現在は、鳩ヶ谷にも椿原・小白川にもガ行鼻音の〔ŋ〕が分布しており、また、昭和42年刊行の『日本言語地図』でも、岐阜県

大野郡には、ガ行鼻音の〔ŋ〕があるということになっている。

明治38年刊行の『音韻分布図』に誤まりがないとすれば、鳩ヶ谷・椿原・小白川も含めて岐阜県大野郡一帯で、語中尾のガ行子音は、明治38年頃から現在までの間に、〔g〕から〔ŋ〕に変わり、それと平行して、明治29年生まれの鳩ヶ谷の話者、明治28年生まれの椿原の話者、明治21年生まれの小白川の話者における語中尾のガ行子音も、それぞれ〔g〕から〔ŋ〕に変化したということになるのであるが、はたしてどうであろうか。

因みに、五箇山では、この『音韻分布図』を基準に考えると、語中尾のガ行子音は、明治38年頃から現在までの間に、〔ŋ〕から〔g〕に変化したということになって、岐阜県大野郡における〔g〕→〔ŋ〕とは著しくくいちがうことになる。

明治38年刊行の『音韻分布図』に即して考えれば、語中尾のガ行子音については以上のような変化が推測されるのであるが、しかし、岐阜県大野郡と五箇山に限って言えば、『音韻分布図』そのものの信憑性がそもそも問題となるので、それを基準に考えたこの推測を、そのまま認めるわけにはいかない。

庄川流域における〔ŋ〕と〔g〕の関係について考える場合には、以上のようなことを念頭に置きながら、もっと別の角度、たとえば、言語地理学的観点などから検討を加え、説明していかなければなるまい。

庄川流域には、次に示すように、語中尾のガ行子音〔g〕と「村内結婚」・「紙漉き」・「落武者伝説」などの言語外の事情とが、重なり合って分布するという事実が見られるが、これなども、〔ŋ〕と〔g〕の関係を探ろうとする場合には、何らかの手がかりになり得るのではないかと考える。

庄川流域におけるガ行子音の問題については、その後も引き続き調査を行ないつつあるので、いずれまた稿を改めてこの問題について考えてみることにしたい。

事 項 \ 地 点	A	B			C
	五 箇 山 二 田 俣 島	小 牧(42) 下 辰 巳(62)	二 又(60) 堂 (61)	中河内(30)	A・B以 外の地点
〔g〕	○	×	×	×	×
村 内 結 婚	○	○	○	○	×
紙 漉 き	○	○	×	×	×
落 武 者 伝 説	○	×	○	×	×

○は「ある」（または「あった」）

×は「ない」（または「なかった」）

2・3・5 「セ」「ゼ」

石川県では、「セ」「ゼ」を〔fe〕〔dʒe〕または〔ʃe〕〔dʒe〕と発音することが多いが、富山県ではそうはならず、「セ」「ゼ」は一般に〔se〕〔dʒe〕と発音される。

ところが、同じ富山県でありながら、中河内(30)と五箇山の平村だけは、他の地域とはちがって、「セ」「ゼ」は全部〔fe〕〔dʒe〕となる。たとえば、〔ʃenaka〕（背中）・〔afe〕（汗）・〔dʒeɸi〕（銭）・〔kadʒe〕（風）など。ただし、杉尾(12)と祖山(13)は、同じ平村であるのに、〔fe〕〔dʒe〕とはならず、〔se〕〔dʒe〕だけである。

〔fe〕〔dʒe〕は、すでに述べた通り、古音の残存と思われるが、それがどうして五箇山の中でも特に平村という限られた地域にだけ残ることになったのか、はなはだ興味の持たれる問題である。

音韻についての報告は以上で終り、次に、語彙の分布について述べる。

2・4 語彙の分布

五箇山は、音韻の面だけに限らず、語彙の面でもまた平野部の方言と大きく対立する。

庄川流域を、五箇山と五箇山以外の地域（庄川流域からはずれる富山・石川の他の地域も、便宜上、ここに含める）とに分け、両者の間に見られる語彙のちがいを具体的な語例をあげて示せば次のようになる。

なお、分布範囲の広い俚語を、ここでは、そ

れぞれの地域における代表的俚語と認め、語形の前に○を加えて示す。

項 目	五 箇 山	五箇山以外の地域
なめくじ	○ナメクジラ	○ナメクジリ
	ネ バ	ミョーミョーツノ ダシ
	チチクジラ	メメコ
げんのし	○チョコバナ	○ゲンノショー
ようこ	ローソクグサ	ゲンノショーコ ローソクバナ ゲンバナ チョコバナ
桑の実	○ツバミ	○クワノミ クツツバミ ツナミ ツマミイチゴ ツバミ
塩味がう	○アマイ	○ショムナイ
すい	シオアマイ ショムナイ	アマイ
炊 く	○ニル タク	○タク ニル
数える	○カズネル カズエル	○ヨム カズエル カゾク
井 戸	○イド	○イケ イド
しもやけ	○シモヤケ	○イキヤケ

	シミヤケ	シンバレ
	イキヤケ	シモバレ
		シモヤケ
つらら	○カネコリ	○カネコロ
	ゴーリ	タリキ
		タンタリキ
		シンシンタリキ
		シッタータリキ
		カレンコ
		カネコリ
ものもらい	○メーモリ	○メボロ
	メンボロ	メモライ
		イモライ
		メモリ
親類	○オヤコ	○イッケ
	イッケ	イッケマツエ
		ルイケ
		イチモン
		エンジャ
		オヤコ
分家	○デエ	○アライエ
	アライエ	アジチ
		シntax
		ベッケ
		デエ
膝頭	○ヒザカブ	○オケソク
		ヒザコボシ
		ヒザマンジュウ
		ヒザボボ
		ヒザブシ
		オカザリ
坐る	○ツクバウ	○オツクバイスル
		ネマル
		ウチウラカク
		ツクバル
		ツクバウ
あぐらをか	○ネマル	○アグチカク
		アイグチカク
ネマルの意味	○あぐらをか	○坐る
	く	坐るとあぐらをか
		くの両方

柴田武先生の「下北方言の分布」⁽⁹⁾や真田信治氏の「越飛国境地帯における方言の分布」を参考に、五箇山に多く分布する○印の俚語をまとめて五箇山型、五箇山以外の地域に多く分布する○印の俚語をまとめて平野部型と呼び、その分布状態を地点ごとに示せば次の表のようになる。

なお、表の中で用いている記号のうち、●は五箇山型、○は平野部型、十は五箇山型にも平野部型にも属さない別の語形の俚語、一は未調査の場合を示す。

国立国語研究所編『日本言語地図』の場合には、五箇山では下梨(10)しか調べていないので、五箇山に平野部とちがう形の俚語が分布していても、それが、下梨だけのものなのか、それとも、五箇山一円に分布している俚語なのか把握しにくかったのであるが、この一覧表を見ると、『日本言語地図』にも出てくる「アマイ・ニル・カズネル・イド・ツクバウ・アグチカク」などの語は、下梨だけのものではなく、五箇山一円に広く分布する俚語であることがわかる。

次に、この一覧表に即して、庄川流域における語彙の分布傾向を総合的に見ていくことにする。次に掲げる図3は、五箇山型と平野部型および五箇山型にも平野部型にも属さない別の語形の語の数を地点ごとに調べ、それを地図にまとめて示したものである。

図3で、まず注目されるのは、五箇山と平野部との間に見られる著しい地域差である。図3でとりあげた語に限って言えば、五箇山型の語は平野部にはあまり分布せず、平野部型の語もまた五箇山にはあまり分布しないという相補的な関係が両者の間に認められる。

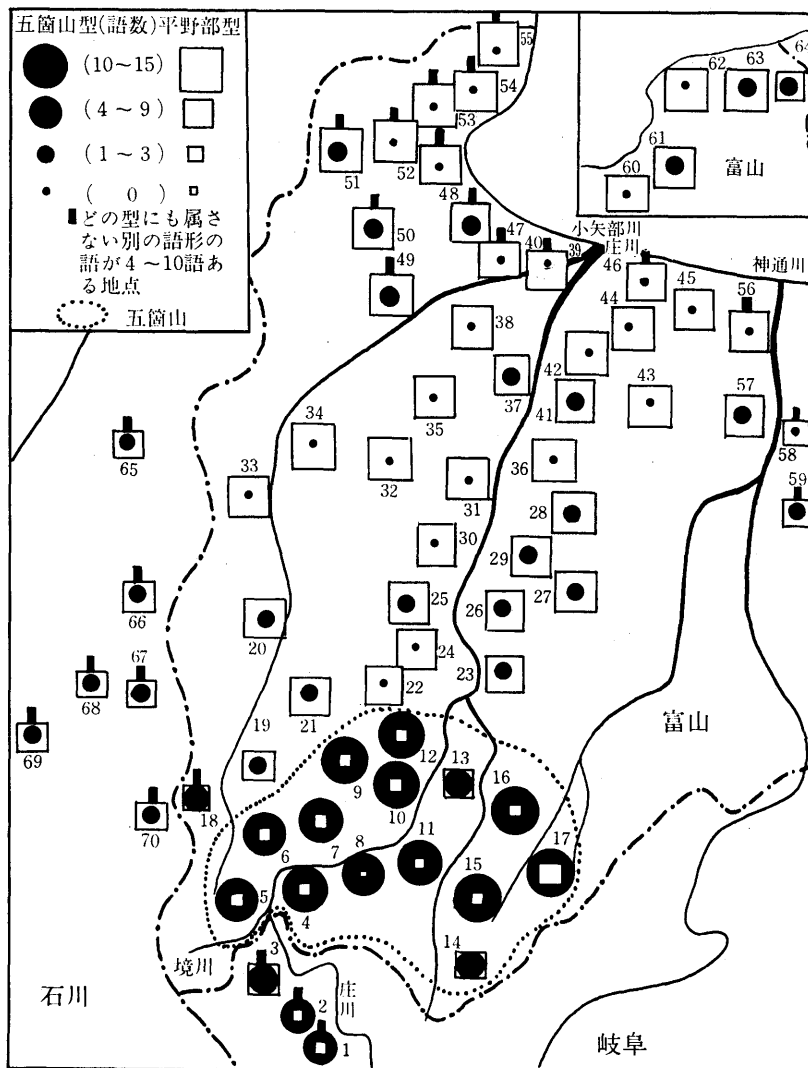
次に注目されるのは、五箇山型にも平野部型にも属さない語は語で、まとまりのあるいくつかの分布地域を形成しているということである。その内容を検討してみないとはいきりしたことは言えないが、これは、庄川流域を、語彙の面から、

語彙の地点別一覧

地点番号	地名	項目 話者	なめくじ	げんのしょうこ	桑の実	塩味がうすい	炊く	数える	井戸	しもやけ	つらら	ものもらい	親類	分家	膝頭	坐る	あぐらをかく	ネマルの意味	●の数	○の数	＋の数
1	鳩ヶ谷	女29	○	+	●	●	○	+	●	+	●	+	○	+	+	+	●	●	6	3	7
2	椿原	男28	○	+	+	●	○	+	●	●	●	+	○	+	+	+	●	●	6	3	7
3	小白川	女21	○	+	+	●	○	●	●	●	●	+	○	+	●	○	●	●	8	4	4
4	楮	女35	●	●	●	●	●	●	●	+	+	●	●	+	●	○	○	●	11	2	3
5	西赤尾	女22	○	●	●	●	●	●	●	●	●	○	●	●	●	○	●	●	13	3	0
6	菅沼	女43	●	●	●	●	●	●	●	●	+	●	○	●	●	●	○	●	13	2	1
7	細島	男25	●	●	●	○	●	●	●	○	+	●	●	●	●	●	●	●	13	2	1
8	上梨	女30	●	+	●	●	●	●	●	●	+	●	●	●	●	●	●	●	14	0	2
9	梨谷	女34	●	●	●	○	●	●	●	●	●	●	○	●	●	●	●	●	14	2	0
10	下梨	女20	●	+	●	●	●	●	●	●	●	●	○	●	●	●	○	●	13	2	1
11	下出	女26	●	●	●	●	●	+	●	+	+	●	○	●	●	●	●	●	12	1	3
12	杉尾	女40	●	●	●	●	●	●	●	●	+	●	○	●	●	●	●	●	14	1	1
13	祖山	女36	●	+	●	●	●	+	●	○	+	●	○	○	●	○	○	●	8	5	3
14	大勘場	女10	●	+	●	○	○	+	●	●	●	●	○	●	●	○	+	●	9	4	3
15	坂上	女39	●	+	●	○	●	+	●	●	●	●	○	●	●	●	●	●	12	2	2
16	利賀	男32	●	+	●	○	●	+	●	●	●	●	○	●	●	●	●	●	12	2	2
17	上百瀬	女20	●	+	●	○	○	+	●	●	●	●	○	●	●	○	●	●	10	4	2
18	中河内	女28	+	+	●	○	●	○	●	○	●	+	○	○	●	●	+	+	6	5	5
19	重安	男37	○	+	+	○	○	+	○	○	●	●	○	○	+	○	+	○	2	9	5
20	福光	女28	○	+	+	○	○	+	○	○	●	+	○	○	+	○	○	○	1	10	5
21	城端	女23	○	+	+	○	●	○	○	○	○	○	○	○	+	○	○	+	2	10	4
22	井波	女27	○	+	+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	○	○	○	0	13	3
23	小牧	男36	○	+	●	○	○	○	○	○	+	○	○	○	○	○	○	+	1	12	3
24	青島	女24	○	+	+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	○	○	○	0	13	3
25	筏	男36	○	+	+	○	●	○	○	○	○	○	○	○	+	○	○	○	1	12	3
26	庄	女28	○	+	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	+	1	12	3
27	井栗谷	男26	○	+	●	○	○	+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	●	2	12	2
28	福岡	女28	+	○	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	○	1	13	2
29	安川	女33	○	○	●	○	○	○	○	●	○	○	○	○	+	○	+	+	2	11	3
30	太田	女34	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	+	1	13	2
31	柳瀬	女34	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	○	0	15	1
32	出町	女18	○	+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	○	+	○	0	13	3
33	石動	女39	○	+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	+	0	13	3
34	福岡	女37	○	+	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	+	+	1	12	3
35	戸出	女17	○	+	○	○	○	○	○	○	○	○	+	○	○	○	+	○	0	13	3

地点番号	地名	項目 話者	なめくじ	げんのしょうこ	桑の実	塩味がうすい	炊く	数え	井戸	しもやけ	つらら	ものもらい	親類	分家	膝頭	坐る	あぐらをかく	ネマルの意味	●の数	○の数	＋の数
36	中田	女24	○	+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	○	0	14	2
37	二塚	女31	○	○	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	+	○	1	14	1
38	高岡	女18	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	○	○	+	○	+	○	0	13	3
39	伏木	男37	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	+	○	+	○	○	+	0	12	4
40	雨晴	女35	○	○	○	○	○	○	○	○	+	+	+	○	+	○	○	○	0	12	4
41	島	女33	○	○	○	○	○	○	●	○	○	○	○	○	○	○	○	○	1	15	0
42	大門	女26	○	+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	○	○	○	0	14	2
43	小杉	男27	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	○	○	○	0	15	1
44	松木	女40	○	+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	○	○	○	0	14	2
45	海老江	女35	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	+	○	○	0	14	2
46	新湊	男40	○	+	○	○	○	○	○	○	○	○	+	+	+	+	○	○	0	11	5
47	島尾	女27	○	○	○	○	○	○	○	○	+	○	+	●	+	+	○	○	1	11	4
48	氷見	女34	○	○	○	○	○	○	○	○	+	+	+	+	+	○	○	○	0	11	5
49	飯久保	女9	○	○	○	○	○	○	○	○	+	+	+	●	+	○	○	+	1	10	5
50	万尾	女37	○	○	○	○	○	○	○	○	+	+	+	●	+	○	○	+	1	10	5
51	谷屋	女34	○	○	○	○	○	○	○	○	+	+	○	+	+	○	○	●	1	11	4
52	横山	女16	○	○	○	○	○	○	○	○	+	+	○	+	+	○	○	○	0	12	4
53	阿尾	女34	○	○	○	○	○	○	○	○	+	+	○	+	+	○	○	○	0	12	4
54	宇波	女34	○	○	○	○	○	○	○	○	+	+	+	+	+	○	○	○	0	11	5
55	中田	女31	○	○	○	○	○	○	○	○	+	+	○	+	+	○	○	○	0	12	4
56	四方	女20	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	○	+	+	+	○	○	0	12	4
57	呉羽	女32	○	+	○	○	○	○	○	○	○	○	+	●	+	○	○	○	1	12	3
58	富山	女32	○	+	○	○	○	+	○	○	○	+	+	+	+	+	○	○	0	9	7
59	新庄	男30	○	+	○	○	○	+	○	○	●	+	+	+	+	○	○	○	1	9	6
60	滑川	女30	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	○	+	+	○	○	○	0	13	3
61	魚津	女30	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	+	●	○	○	○	1	13	2
62	泊	女33	○	○	○	○	○	○	○	○	○	+	○	○	+	+	○	○	0	13	3
63	境	女23	○	○	○	○	○	○	○	●	○	+	○	○	+	○	○	○	1	13	2
64	市振	女35	○	一	○	○	○	+	●	●	○	+	●	○	一	○	○	+	3	8	3
65	津幡	女25	○	○	●	○	○	○	○	+	+	+	+	+	+	+	○	+	1	7	8
66	二俣	女33	○	+	●	○	○	○	○	+	+	+	+	+	+	○	○	+	1	7	8
67	田島	女17	○	+	●	○	○	○	○	○	+	+	○	+	+	○	○	●	2	9	5
68	下辰巳	女31	○	+	●	○	○	○	○	+	+	+	+	+	+	○	○	○	1	8	7
69	堂	女32	○	+	+	○	○	○	○	+	+	+	+	+	+	●	+	+	1	5	10
70	二又	女35	○	+	●	○	○	○	●	+	●	+	+	+	+	○	○	+	3	6	7

図3 語彙の総合分布図



- (1) 岐阜県白川村
- (2) 五箇山
- (3) 砺波平野の散村地帯
- (4) 富山市周辺
- (5) 氷見地方
- (6) 加賀地方

というふうに区画できることを暗示しているように思われる。

庄川流域にも、地点ごとにちがう語が分布していると言ってもよいほど複雑多岐な分布を示

す、「肩車・片足跳び・お手玉・おたまじゃくし・かまきり」などの語や、それとは逆に地域差をほとんど示さない、「ボンボスル（おんぶする）・カズク（背負う）・トナワ（とうもろこし）・ボブラ（かぼちゃ）・イバラボタン（ばら）・メロ（女）・ドロ（土）・マバヤシイ（まぶしい）・ハナガ（匂い）」などの俚語が分布しているわけだから、図3だけを手がかりに、語彙による区画を立てることはもちろんできないのであるが、しかし、一応の目安にはな

り得ると思う。

図3については、以上のほかに、五箇山型の語と平野部型の語との関係、これらの語と五箇山型にも平野部型にも属さない語との関係ということも大きな問題となるが、もっと調査の網の目を細かくし、語ごとに検討を加えてみた上でないと、確かなことは言えないので、ここでは、語彙の分布に上述のような事実が認められるということを指摘するにとどめ、解釈を加えるのはひかえることにする。

おわりに

庄川流域における方言分布については、五箇山と平野部との対立、平野部における内陸部と海岸部との対立ということが大きな問題となるので、本稿でもその点に着目し、分布の概要と解釈の可能性について述べてきたが、庄川流域における方言分布については、そのほかに、砺波平野の散村地帯における方言の実態とその動向ということも大きな問題となる。

散村地帯は、普通の集落とはちがって、いわば、一軒一軒の家が、一つ一つの集落を作っているようなものであるから、そこには、他の地域には見られない独得な言語の動きがあるのではないかと予想される。今後は、そういう点にも十分留意し、砺波平野の散村地帯とその周辺に焦点を絞り、方言の実態と動向を探っていきたいと考えている。

(注1) 岩井隆盛「富山・石川」(『方言学講座』第3巻所収)・国立国語研究所編『日本言語地図』(第1集～第4集)・佐伯安一『砺波民俗語集』・

大田栄太郎「越中の方言」・真田信治「富山・岐阜・石川県境地帯における蛙をめぐる語の歴史と体系」(『国語学研究』第10集所収)・真田信治「富山県利賀谷におけるアクセントの動態—2拍名詞第2・3類を主として—」(『文芸研究』第68集所収)・真田信治「野生の稗の方言分布とその解釈—富山・岐阜・石川県境地帯における—」(『金沢大学語学・文学研究』第2号所収)・真田信治「越飛国境地帯における方言の分布」(『越飛文化』第16号所収)など。

(注2) 岩井隆盛氏が「富山・石川」(『方言学講座』第3巻所収)で述べておられるところによると、石川県石川郡白峰村にも「フッチョル」(降っている)という言い方があるという。

(注3) 柴田武『日本の方言』による。

(注4) 国立国語研究所編『日本言語地図解説—各図の説明2—』でも、「標準語の「買ってくる」カッテクルが西日本などの「借りてくる」カッテクル地帯に侵入する場合、このような同音衝突があるため、なかなかはいりにくいものと思われる。」(30ページ)と述べている。

(注5) 『金沢大学語学・文学研究』第2号所収。

(注6) [si] [dzi] [tsi] は、[si] [dzi] [tsi] と

も [sú] [dzú] [tsú] と判別しにくい音を表わす。

(注7) 『国語学研究』第12集所収。

(注8) 岩井隆盛氏が「言語から見た海士の出自」(『能登—自然・文化・社会—』所収)で述べておられるところによると、石川県輪島市海士町でも、語中尾のガ行子音は、[ŋ]にはならず、[g]であるという。

(注9) 九学会連合下北調査委員会編『下北—自然・文化・社会—』所収。

[付記] この研究は、昭和45年度文部省科学研究費による研究成果の一部である。

On the Dialectal Distribution of the Basis of the
Sho River in Toyama Prefecture

Eiichiro KAWAMOTO

The regional distribution of the dialect of the Sho River basin in Toyama Prefecture is extremely complex and divergent, especially in its phonemic system and vocabulary. The distributional region of phoneme and vocabulary is largely divided into three parts : the mountainous Gokayama district, the farm area in the plains of Tonami, and the coastal Himi area. A large number of characteristic dialectal differences are observed to be distributed in these areas.